

— 1. 支部長挨拶 —

(社) 日本気象学会北海道支部 支部長 牧原 康隆  
(札幌管区気象台長)

この度、川津支部長の後任として、6月11日に開催されました日本気象学会北海道支部の平成24年度第1回理事会において、第28期の支部長を仰せつかりました牧原でございます。皆様からご支援・ご協力をいただきながら、北海道支部の発展のために微力ではありますが最善を尽くしたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いたします。



はじめに、この1年を振り返りますと、我が国は、多くの自然災害に見舞われました。去年3月の平成23年東北地方太平洋沖地震、7月の平成23年7月新潟・福島豪雨、9月の台風第12号、昨年から今年にかけての大雪、今年5月6日につくば市を中心に大きな被害をもたらした竜巻害など、それぞれに自然の猛威を再認識させられました。また、昨年来の電力不足は、社会生活の質の低下にとどまらず、医療分野、交通分野等において国民の生命に関わる重大な懸念が示されております。

とどまることなく進展する情報化社会の中で、自然における極端現象による災害を減らし、安全な社会生活を維持するため、気象・気候現象のさらなる究明と、予測精度の向上が求められております。

このような中で、「気象学の進歩を通じた社会への貢献」は、従来と変わること無く、むしろ、分野の異なる研究者がそれぞれの力を学会という枠組みの中で出し合うことで大きな貢献につながるという意味で、より重要になってくると考えています。特に、広い分野・さまざまな角度からそれぞれが連携して研究、教育、

応用を進めていくことは、気象学会のまとまりと、会員の裾野を広げるためにも重要と考えております。このような考えを念頭に、今年度におきましても、これまでの取り組みを引き続き継続・発展させたいと考えております。

一方で、Webの普及や気象予報士制度の充実等の社会情勢の変化にも、支部としての的確に対応すべく、情報交換や情報発信とその改善に努めていく所存です。

さて、10月に日本気象学会の2012年秋季全国大会がここ北海道で開催されました。北海道支部では、昨秋から秋季大会運営委員会を発足させ準備を進めてまいりました。特に、大会では、「気象学が地域の未来にいかに関与できるか？」と題して、北海道における気象を活用した地域づくりに気象学がどのように貢献できるかについて、公開シンポジウムを開催し、大会では801名の参加者があり盛況のうちに終了しました。会員の皆様の大会への参加とご支援をいただきありがとうございます。

最後に、日本気象学会は、1882年に創立され、今年は、創立130周年の節目を迎えます。今後とも、地域の特徴を生かした研究はもとより、さまざまな支部活動を通して、研究が進展し、会員間の連携が深まりますよう、会員の皆様と一緒に努めてまいりたいと思います。会員の皆様には、益々のご配慮とご鞭撻を賜りますようお願いして、ご挨拶いたします。